

教会ではしばしば、「しゅうまつ」という言葉が使われることがあります。しかしいわゆる「教会用語」に慣れていないと、「週末(ウィークエンド)」のことを思い浮かべるかもしれません。「もうすぐしゅうまつが来るのです」と叫ばれても、「そりゃそうだろう」となるのがオチです。

ここでいう「終末」とは、歴史の最終的な出来事のことを言います。簡単にいうと、「世の終わり」です。ですから「もうすぐ終末が来るのです」という言葉は、実はとても恐ろしいものなのです。

旧約聖書の中で、神さまは天地万物の創造主として描かれています。そしてすべてのものは、神さまの意志によって終わりも迎えることになるというのが、聖書の考え方です。

終末には神さまの審判がおこなわれ、神さまに対して良き応答をしていた人たちは救われますが、そうでない人たちは滅ぼされると考えられていました。そのため人々は、必死に律法を守り、神さまの怒りを買わないようにと生活をしていきます。

しかしすべてを人間の業に頼っては、救われる人など一人もいないということが、歴史の中で何度も繰り返されてきました。神さまは誰一人として滅びの中には入れないという思いで、イエス様を遣わされたのです。

イエス様によって罪を赦されたわたしたちは、再びイエス様に出会うことを待ち望みます。イエス様が再び地上に来ることを「再臨」といいますが、そのときが「終末」なのです。

したがってイエス様を信じる人にとって、「終末」は希望です。「世の終わりが近づいた」と脅かされても、「わたしにとっては喜びです！」と言い返してください。

次回は「受苦日」です。お楽しみに。



「最後の審判」

ピーテル・パウル・ルーベンス  
(1577～1640年)

次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。

(コリントの信徒への手紙一 15章 24節)

